

淡路島におけるため池活用について ～島の水瓶「ため池」による治水プロジェクト～

1. ため池の有する治水ポテンシャル

- (1) 条例ため池約2千箇所の総貯水量は約45百万 m^3 (ダム30基分)
※ため池が約2万3千箇所あり、ため池密度38箇所/ km^2 は全国一
※水需要324百万 m^3 のうち、ため池が約230百万 m^3 (約7割) を供給
- (2) 条例ため池約2千箇所すべての水位を1m下げた場合、その治水容量は約20百万 m^3 (ダム13基分)
- (3) H26台風19号時、ため池の貯留量は約15百万 m^3 (ダム10基分)
※H16台風23号以上の豪雨でありながら農災は1/8に緩和

2. ため池や地域農業を取り巻く状況

- (1) 米の生産調整等により、水稻作付面積はここ40年で半減
※水稻作付面積 約8千ha (S50) → 約4千ha (H25)
- (2) 農業用水の安定供給を目的に昭和以降に多数の農業用ダムを造成
※柿ノ木谷、本庄川、河内、常磐、谷山、鮎屋川、初尾川、大谷、大日川、上田

3. 島内の防災・減災対策の状況

- (1) 豪雨予報前に人為的にできる減災対策は、ため池・ダムの事前放流
※過去の大災害は連続豪雨時に発生しており、河川の高水位、高潮、山林・田畑の飽水、ため池の満水状態での豪雨前対策が重要
- (2) 河川やほ場、ため池等の整備を進めるには膨大な予算・時間が必要

淡路特有の既存ストック（ため池）を活用した治水対策が有効

淡路島におけるため池活用について ～島の水瓶「ため池」による治水プロジェクト～

推進方策

(1) 事前放流の普及啓発(ソフト対策)

「台風前や秋にため池の落水をすることが当たり前の行動へ！」



①事前放流の呼びかけ

- ・CATV、防災無線、電話等による周知・依頼
- ・「ひょうご防災ネット」を活用した管理者への一斉メール送信

②管理者講習の開催

- ・ため池管理・点検講習とあわせ、治水活用(事前放流)の意義を説明、協力依頼

③かいぼりの展開

(2) ため池の構造改築(ハード対策)

「ため池管理者が取り組みやすい構造へ！」



①ため池改修時に水位低下が容易にできる「**ため池栓**」を設置

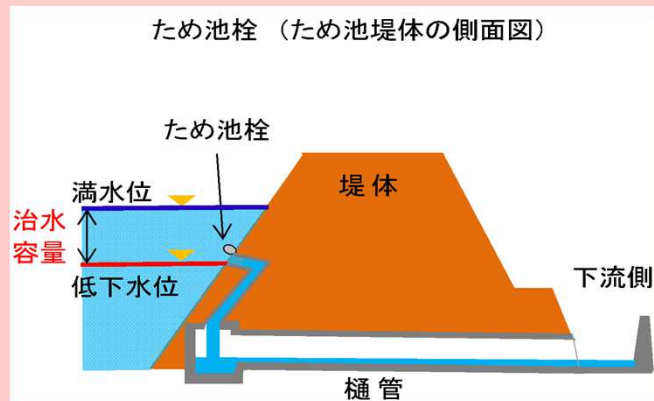
②治水効果の大きなため池に「**洪水吐切り欠き**」や「**放流工**」を設置

③農業用施設災害の洪水吐復旧時に、越流堰へ「**ため池栓**」を設置

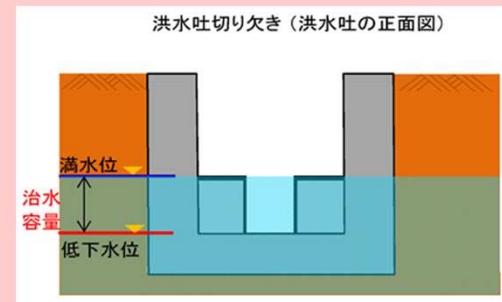
淡路島におけるため池活用について ～島の水瓶「ため池」による治水プロジェクト～

(2) ため池の構造改築(ハード対策)

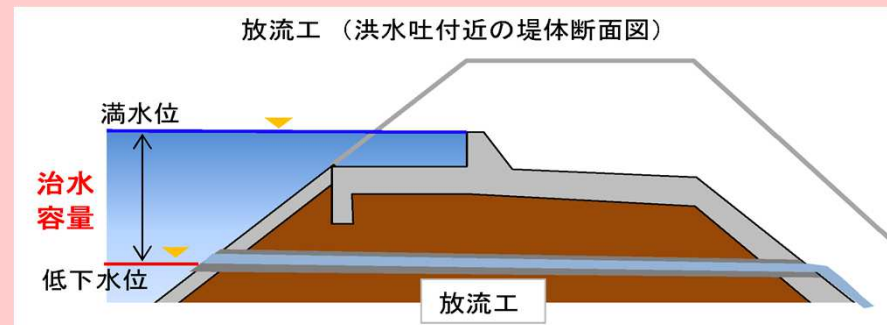
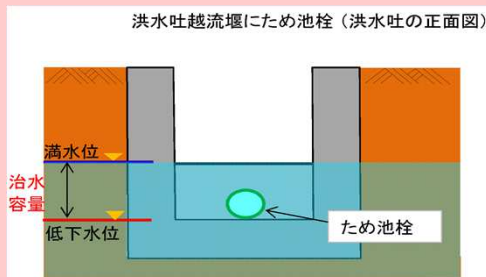
① ため池改修時に水位低下が容易にできる「**ため池栓**」を設置



② 治水効果の大きなため池に「**洪水吐切り欠き**」や「**放流工**」を設置



③ 農業用施設災害の洪水吐復旧時に、越流堰へ「**ため池栓**」を設置



治水効果の大きなため池の評価・検討方針

評価項目①: 貯留可能量

各々のため池が治水に活用可能な貯水容量

評価項目②: カット流量比

ため池による洪水カットが河川流量低減に及ぼす効果

評価項目③: 流域資産価値

浸水が生じた場合にどれほどの資産に影響が出そうか

評価項目④: ため池位置

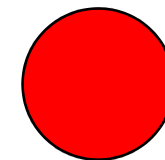
上流域のため池ほど河川の長い区間にわたって流量低減効果を及ぼすため、上流・中流・下流に分類

評価項目⑤: 浸水被害

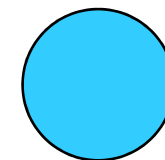
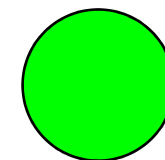
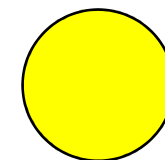
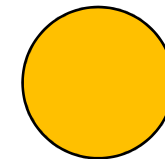
平成26年台風11号、19号による浸水区域とため池を関連づけ

総合評価

◆ ①～⑤の項目を総合的に評価



高



ため池貯留対策の効果

低

